滝乃川学園と渋沢栄一のつながり

北区滝野川一丁目の明治通り沿いに「滝乃川学園跡」の表示板があります。この滝乃川学園は、日本で初めての知的障害児のための教育施設として設立されました。学園創立者の石井亮一は、キリスト教精神に基づいて知的障害の教育・研究に生涯を捧げ、日本の「知的障害者教育・福祉の父」と呼ばれた教育者です。

北区滝野川の園舎と礼拝堂　滝乃川学園提供

学園の起こりは、明治 24（1891）年に発生した濃尾大地震で孤児となった女児たちを石井が引き取ったことから始まります。この中に知的障害の子どもがいたため、石井は「孤女学院」を設立し、障害児の教育と福祉に力を注ぐべく決意したのです。滝野川の地に園舎を建て、明治 30（1897）年に「滝乃川学園」と改称しました。敷地内には寄宿舎や教室、礼拝堂などがあり、健常児と障害児のそれぞれに教育を行う２つの教育部が設けられ、同時に教員・保母の養成も行われました。西巣鴨の庚申塚への移転を経て、昭和３（1928）年に現在の学園がある国立市谷保へと移転しています。

妻の石井筆子は、文久元（1861）年、長崎の有力士族の家に生まれました。東京女学校に学び、フランス留学などを経たのち華族女学校での教育などに関わり、日本の女子教育の確立に大いに貢献しました。1898（明治 31）年、日本女性代表として津田梅子（津田塾大学の創立者）とともにアメリカに渡り、女子教育・社会事業視察も行っています。フランス語や英語を流暢に話し、ドイツ人医師ベルツやフランス人法学者ボアソナードからも称賛された華やかな近代女性でした。

最初の夫との死別を経て、1903（明治 36）年に石井亮一と再婚。最初の夫との間にできた子に知的障害があった筆子は、理想を同じくする亮一を公私ともに支え、苦しい財政の中で学園運営を担いました。懸命に教育に励む筆子でしたが、1920（大正９）年の秋のある夜に発生した火災が彼女の運命を翻弄します。失火原因は、火の怖さを知らない園児の火遊びでした。燃えさかる火に飛び込み、足に大怪我を負いながら必死の救出活動を試みた筆子でしたが、力及ばず、六名の園児が命を落としました。園児たちを救えなかったことに石井夫妻は深く心を痛め、焼失した学園の廃止を決意します。このことは、道徳科の教材「鳩が旅立つ日」（文部科学省）でも扱われています。しかし、学園の廃止を知った人々からの励ましの声と義援金に支えられ、滝乃川学園は財団法人としての存続が決定し、理事長に渋沢栄一を迎えることとなりました。

石井亮一・筆子夫妻　滝乃川学園提供

「滝乃川学園百二十年史上巻」には、「子爵渋沢栄一翁は学園理事長となり、翁は、世間周知の日本財界の巨人、老後の身を軽くしたいと願って一切の公職を去っていた渋沢が『石井さんの事業だけは、経営の労を省いて教育に専心させてあげたい』と言って快諾し、大正 10（1921）年～昭和６（1931）年 11 月に没するまで 10 年４ヶ月理事長を勤めた」とあります。実は栄一は、維新直後の大蔵省で筆子の父・渡辺清と席を並べた間柄でした。また筆子自身も、東京女学校の学友であった栄一の娘・歌子と終生の友として交わっていました。そんな縁もあり、栄一は理事長を引き受けたのでしょう。

巣鴨で栄一を出迎えた亮一は、度重なる労苦に見違えるほど痩せ細り、元気を失っていたといいます。傍らで寄り添う筆子に、栄一は、「上州渋川の奥の四万温泉に２週間ほど行ってきなさい。多少不便な山の湯だが、どんな名医にかかるより効き目があると我が故郷では評判だ。石井君の神経と胃腸にも、お筆さんの足の怪我にも効き目抜群、騙されたと思って行きなさい」と優しく語りかけました。これが渋沢理事長から亮一に出た初の出張命令だったそうです。

晩年の安寧な暮らしを破り、弱者を守る活動に躊躇なく身を投じた栄一。石井夫妻との絆に、その人となりを改めて感じることができます。